

令和3～4年度 施設提案型モデル事業 「最終報告書」

施設名 みずきこども園

【取り組みのテーマ】

「フリーデーで育むもの」
～タイムフリー・スペースフリー・ヒューマンフリー 3つのフリーを自分で選ぶ～

【2年間の主な取り組み内容】

- ・各月フリーデーの実施 ・毎日のフリータイムの時間（9時～10時）の確保 ・園内研修会
- ・金沢大学附属幼稚園前園長 池田三津子氏との研修会
- ・2歳児クラスのフリーデーに参加する。（月2～3回）
- ・未満児保育の中で、子どもの思いを尊重し豊かな遊びを保障する日課の構築や環境設定、保育士の援助について考え、学び。
- ・公開保育の実施

【研究のまとめ】

開園当初より試行錯誤を繰り返しながら行ってきたフリーデーが以上児クラスには定着してきたが、昨今は新しく加わる保育教諭に、どのように伝え共通理解していくかが新たな課題となったり、更なるねらいとして子ども達の「遊び込む」「遊びきる」姿を目指し環境整備や保育教諭の関わりを再度検討してきた。また、昨年度よりの課題として取り上げてきた2歳児クラスのフリーデーが令和3年度のまとめにも記載したように少しずつ定着してきた。

<園全体、全職員でのフリーデーへの共通理解>

以上児クラスを担当することになるとフリーデーの各コーナーを一人の保育教諭が担当し、保育教諭自身も参加するため、子ども達と過ごす日々の経験やフリーデーでの先輩保育教諭とのミーティングを通してフリーデーに関わっていくことになる。未満児クラスの担任は、直接的にフリーデーに関わる事が少ないこともあり園全体、全保育士の共通理解が難しくもあった。様々な保育教諭や保育士がフリーデーを通して子ども達と関わる中で、どのように共通理解していくかを考えた。そこで29年度から毎年行っている園内研修の「エピソード検討会」と「園内公開保育」に再度重きを置き、特に園内公開保育でフリーデーを見学できるようにしたり見学の際に各自が一日ゆっくと園内を周り、主体性を大切にする保育や環境設定、保育教諭の関わりから感じた事を伝えるという取り組みを継続して行ってきた。保育の経験年数や立場は関係なく、ざっくばらんに言い合える、風通しの良い雰囲気作りのため、自由に発言できることを周知することは勿論だが、直接的に言うのではなく用紙に質問形式で尋ね、各年齢、各遊びの担当の保育教諭や保育士が答えられるようにしている。そうすることで、知りたいことや興味を持ったことを知ることができ、また答えるために考え学ぼうとする姿勢が保育教諭や保育士の中に育ってきているように感じる。研修会は「大変」と感じては継続が難しくなるため、短時間で行えることを前提としてきた。

<フリーデイのスローガン>

様々な保育教諭や保育士がフリーデイに関わることで各年齢のフリーデイのねらいの周知も難しくなってきた。そこで今年度は、池田先生のご助言もあり、各年齢でスローガンを作ることにし各年齢のフリーデイのねらいを明確にした。

2歳児たんぽぽ組

「友だちと一緒に遊んで楽しい！保育士と一緒に遊んで楽しい！ 楽しいを真似っこすることがもっと楽しいにつながる」

3歳児さくら組

「保育教諭や年上児との関わりが楽しいフリーデイ」

4歳児ゆり組

「異年齢や保育教諭と関わりながら自分で遊びをつくるフリーデイ」

5歳児ひまわり組

「異年齢と関わりながら自分達がつくるフリーデイ」

各年齢のねらいが誰が見ても明確になったことで、今後どの年齢の子ども達に関わる時も共通したねらいを保育教諭、保育士が持つことができる。

<遊びだす→遊ぶ→遊び込む→遊びきる>

令和4年度は、「遊び込む、遊びきる子ども達」の姿を意識しフリーデイを行ってきた。フリーデイの楽しさは、子ども自身が「遊びたい」という気持ちから、自分から「遊びだす」ことで始まる。ここまでは、私たちが試行錯誤して考えてきた3つの間の「時間、空間、仲間」で子ども自身が主体的に行動し遊びだすことが増えてきた。しかし、その姿は本当に遊び込んで、遊び切っているのだろうか・・・と池田先生のご指摘からハッと考えさせられた。

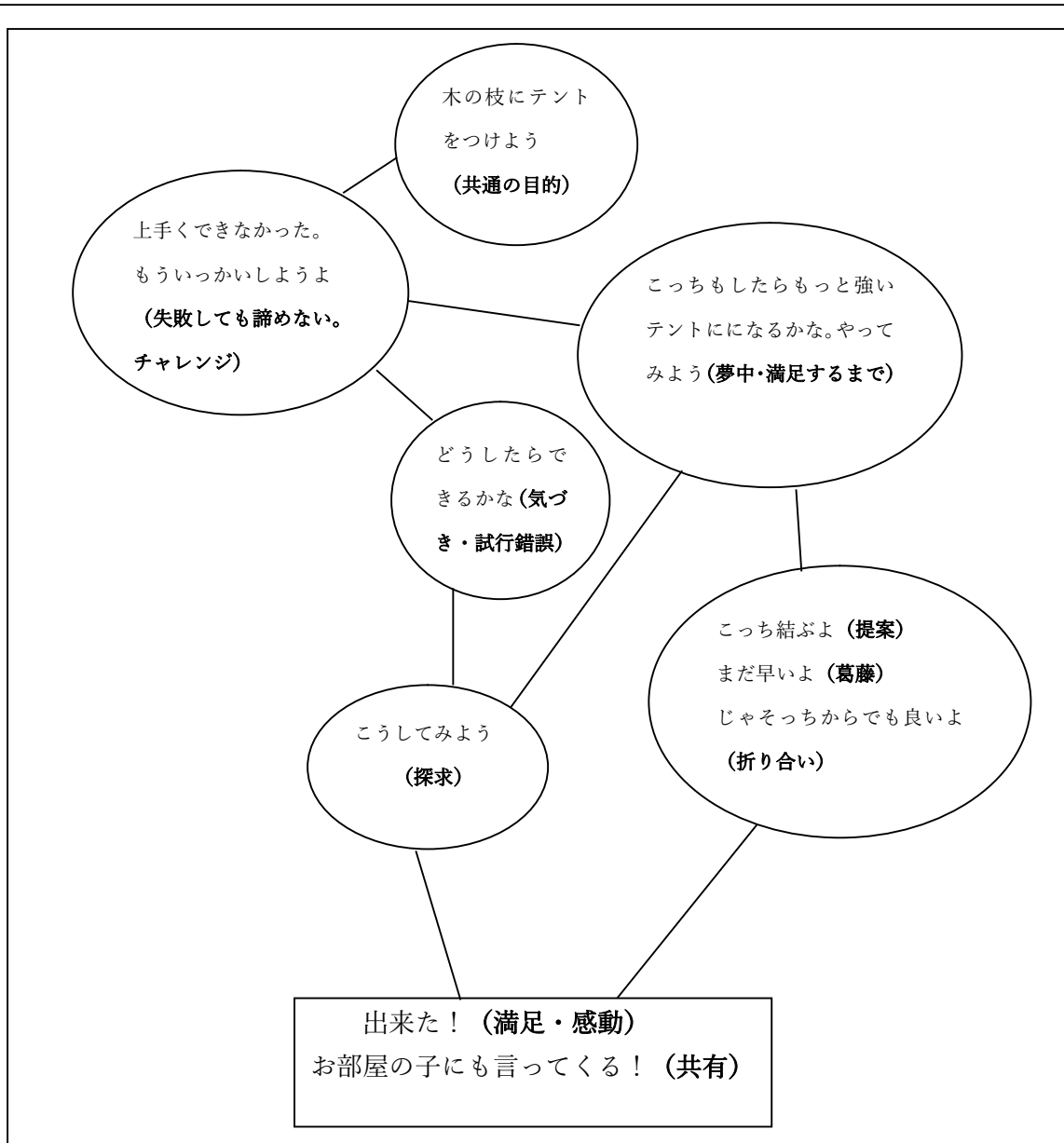
そこで、以上児保育教諭間で例として園庭の環境を皆で考えてみることにした。

園庭担当の保育教諭から

- ・子ども達の好きな遊びが同じなので毎回同じ遊びになる
- ・園庭担当の保育教諭が3、4歳児の担任の為か遊びを考えだし発展させる5歳児が遊びに来ることが少ないなどの振り返りがあがる。

今一度フリーデイの原点に戻り、「遊びを決めるのは子ども達」「子ども達の共通の経験が遊びを盛り上げ発展していく」ということを考え直し5歳児クラスでフリーデイの振り返りから園庭の遊びの楽しさを話し合ったり園庭で困ったことをテーマにして取り上げたりした。また、子ども達にとって身近である園隣の西公園で木の枝や木の実を集めケーキ屋さんごっこをしたり、布を木の枝に張ることでテントやキャンプのタープに見立てキャンプごっこを発展させた。布は子ども達が落ちつく小さな空間ともなり人気の場所となった。

遊びの中で、子どもは以下のような様々な気持ちを経験し育んでいく。



「遊び込む」とは遊びに夢中になる中でその子らしいイメージが表現され、それが活かされ遊びが広がっていくことであり、「遊びきる」とは自己を発揮しながら十分に遊び込み満足感や達成感を味わうことではないかと考えた。子ども達のそのような遊びからの学びをより深めていくために私たち保育教諭も一緒に遊び込み、子ども達の遊びや思いを深めたり広げたり継続し展開していくことが大切となる。しかしまだまだそれが出来ていない面も多い。保育教諭は様々な役割を持ちながら遊びの場所を担当している。子ども達の安全、行動、他の場所での遊び等、保育教諭自身もより広い視野を持ち質の高い学びの場となるように努めていくことが大切である。

<公開保育研修会からの学び>

- ・公開保育を進めるにあたり保育環境を皆で考えたり「玩具・遊具・教具」の意味を再確認し学びを深めたりできた。
- ・自分達の保育を職員全員が、他園の先生方に伝えようとする姿勢が見られた。
- ・「月に数回のフリーデイと毎日1時間のフリータイムでは子ども達は満足できているのか」という質問があったが自分は一度もそう感じたことはなく、子ども達も「明日またしよう！」と言う。遊びの継続がフリータイムによって毎日保障されていることの大切さを実感し改めてフリーデイが毎日あるから良いのではなく、たまにあるからこそ育まれる力を確認していきたいと思うようになった。
- ・「色々なところに余白があることがこのプロジェクトの良さではないか」との言葉を頂き新しい視点で興味深く感じた。
- ・様々な質問に対ししっかりと答えられるように意図を持って保育をすることの大切さを職員間でもう一度周知したい。
- ・「自分を磨く」「子どもを磨く」関わり合いと磨かれ擦り合わせていく大切さを学んだ。
- ・他園の公開保育に行きもっと学びたいと思った。

<最後に>

私たちは開園当初より、みずきこども園ならではの独特な形状の園舎の作りに悩みながらも、フリーデイという方法では、逆にこの形状が活かせることに気づき試行錯誤しながら活動を進めてきた。今、少しずつではあるが、みずきこども園としての環境や保育者の関わりに自信が持てるようになってきたように感じる。その中で保育者、子ども達皆が、上手くいかないことを逆に楽しみ仲間と一緒に試行錯誤できるようになってきたのではないかと思う。結果だけではなくそのプロセスを共有出来るようになった事に手応えを感じられることを糧とし今後も保育そのものを楽しめる保育者でいたい。

令和3～4年度 施設提案型モデル事業 「最終報告書」

施設名 馬場幼稚園

【取り組みのテーマ】

子ども主体の遊び理解に基づく教育課程の再編を目指して

【2年間の主な取り組み内容】

- (1) 教育課程の作成と作成したねらいが今の子どもの姿と合致しているかの確認
- (2) ねらいを達成するための保育者の援助のあり方の検討
- (3) 園内研修の構築とカリキュラム・マネジメントおよびPDCAサイクルについての理解

講師：虫明淑子（北陸学院大学人間総合学部子ども教育学科教授）

【研究のまとめ】

<研究の成果>

1. 保育者の援助の変化に伴う子どもの育ちの変化

①遊びの環境づくりに対する考え方が変わった

これまで、遊びの数が多い方が子どもの遊びは豊かになると考え、園庭や保育室に多くの遊びのコーナーをつくっていた。初回の園内研修では講師より、コーナーで子どもがじっくりと遊ぶ姿が見られず転々とする子どもが多い、保育者が遊びを見きれておらず必要な援助を要する場面に気付いていない、子どもの遊びの姿に対する共感が少ないなど指摘を受けた。その際、遊具で子どもを遊ばせることに重きを置いていたこと、保育者はその場の思い付きで遊びを出していたこと、コーナーにあるモノや道具が散らかりっぱなしになりがちでその整理に保育者が追われていたことなど、課題や悩みをありのままに開示、共有した。それが本研究の始まりだった。翌日にはすぐに、園庭にある遊びを保育者が見守れる数に減らす、道具の数を見直す、プラスチックよりも木切れや葉っぱなどの自然素材を遊びに取り入れるなど、改善に取り組んだ。また、子どもの遊びの姿の全体像が把握するために、各クラス（学年）の遊びを1つの環境図に記録するようにした。さらに、園庭やホールでの遊びの環境は様々な年齢の子どもが入り混じり遊ぶ方がよいと考え異年齢で遊ぶ時間をとっていたのを、異年齢では達成されないねらいがあることを理解した上で、同年齢の子ども同士で遊び込める時間を確保することなど行っている。

②保育者の関わり方が変わった

遊びの環境づくりへの考え方が変わったことで、保育者があれこれ動いて回らず、落ち着いて子どもと関わるできるようになった。以前の保育よりも、子どもは遊びの中で何を楽しんでいるのか、どのようなことに挑戦しようとしているのかなどが見取れるようになり、そこで得た気付きや発見を、設定保育に活用しようとすることもある。

③記録の取り方が変わった

日誌はこれまで、その日に行われた行事とその反省を中心に書くことが主だった。講師には、どうせ書くのなら効率的に、明日以降の遊びの環境構成や援助を見直せる書き方にするよう提案された。1年次は、日誌に環境図を書き入れ、遊びの読み取りに重点を置く書き方に変えた。2

年次は環境図を書き入れることに負担を感じる保育者もあったので環境図のない週日案形式に戻したが、図は入れなくても、遊びの読み取りに対する援助の実際など、以前とは違う書き方に変わっている。また、ねらいの意味に気付き、複数担任のどちらもが週日案に立てたねらいに基づき実践するようになった。日誌やエピソード記録の書き方もねらいに視点を置いて書くように変わった。遊びのねらいを行事の指導につなげる努力が見られることもある。

④活動・行事の見直し

遊びを中心とした保育を目指すようになると、今までの活動や行事に対する疑問が出てきた。年長組の活動では、季節ごとに行う森の幼稚園に加え、英語教室・体育教室・スイミングに追われることが多く、じっくり遊ぶ時間が取れない週もあった。そこで、遊び中心の保育の重要性を再確認したことを機に、英語教室を廃止、体育教室・スイミングの回数を減らし、子どもが自由に遊ぶ時間を確保することにした。保護者に対しては、1年次研究終了時、以前の園では見られない遊びが展開されるようになった3月の懇談会で趣旨を伝えたところ、子どもの遊びの充実のためならば、と思いの外、反対意見が出ることもなく、了承された。

次に、行事については、これまでほとんどの行事が全て保育者による企画で、保育者は大変だと感じつつも時間に追われながらやってきていた。しかし、子どもが何に興味をもっているのかに目を向けられるようになったことで、それをヒントに行事をつくるようになった。例えば、夏の集いは、簡素ながらも子どもメインで遊びのコーナーをつくるようにした。また、収穫感謝の集いでは子どもができる役割を増やし、準備段階から子どもと一緒に進めるようにした。さらに、子どもを楽しませるだけになっていたハロウィンなどの行事は廃止することにした。このような取り組みにより、保育者は以前に比べ、行事に対する負担感が減ってきた。また、ねらいに基づく遊びや活動内容は、全員が同じ内容を達成しなければならないものだと考えていたが、同じねらいであっても個々の子どもの興味や発達に応じて、内容は違ってよいという考え方に変わった。例えば、製作物ではこれまで全員が同じ素材を使い、同じ物をつくるのがほとんどだったが、子どもの興味関心に合わせ素材や方法を工夫し、その子どもに合わせた形でねらいを達成すればよいと、保育者の意識が変わり始めている。

⑤保育のちぐはぐさの解消

振り返れば、今までは、園内でねらいの重要性を意識したことはなく、共有することもなかった。そのため、各学年担任は、ねらいの意識どころかねらいのない計画を勝手に立て、思うままに保育を行っていく面があった。その結果、例えば、4歳児が5歳児よりも高い活動内容になることもしばしば起きていた。3歳児から5歳児までの発達を連続的に見通した教育課程を作成し直し、カリキュラム・マネジメントやPDCAサイクルについての理解を深められたことで、保育者の嗜好や力量、思いつきで左右されるような保育のちぐはぐさからの解消が進んだ。

2. その他の成果

①保護者の園の保育理解が進んだ！

クラス懇談会では保護者に対し、各クラスの保育の中で見られる子どもの育ちの姿を、期のねらいに基づき伝えられるようになった。また、教育課程には期ごとにねらいがあることや遊びが学びにつながる道筋があるなど伝えることで、幼稚園教育への理解を促す機会にもなっている。ねらいに沿って保育を伝える方法は、保育者も自分のしている保育を伝えやすく、保護者にとっても理解しやすいようである。クラス懇談会や保護者主催研修会などへの参加率が以前よりも増え、園に寄せられる保護者から感想も目に見えて増えている。

②入園希望が増えた！

これまでは入園希望者を増やすために、言わば、保護者に気に入られるような保育をしてきていたのだが、それに反し、入園希望者は減少傾向にあった。このような状況で、保護者に喜ばれる英語をやめることに不安はあったが、この機に取りやめた。しかし、園見学に来た保護者に、実際の子どもの遊びを見せ、園の目指す保育についてねらいに沿って説明していると、見学に来たその日にそのまま入園する希望が増えるだけでなく、3歳以上の転園希望者が増えている。保護者ではなく子どものための保育に変えたことで園児数が増加していることに驚いている。

3. 課題

①教育課程、道半ば

今までの教育課程は、文献等を参考に、文言を引っ張るように作成してきたが、今となつては、そのような作業が園の保育にとって何の意味もなかったことがよく分かる。3歳から5歳児までの3年間の教育課程の期のねらいを設定することは、言葉1つ1つに引っ掛かりを覚えつつ作業することになるので難しく、なかなか完成に至らない。しかし、できるだけ自分たちの言葉を使って、誰が読んでもわかりやすく、新しく就職した先生が読んでもわかる教育課程を今、時間をかけても作ろうとしている。現在、5領域の視点を取り入れて作成しているが言葉に悩むことが多く、道半ばである。計画と実践をつなげることを楽しみながら、完成に向けたい。

②教職員の共通理解

保育者の保育を見る視点は以前と比べ変わってきているものの全員がそうかと言うとまだまだである。園の保育者全体が成長を促すためには、教師研修会等の機会を積極的に利用し、園内研修や協議で得た学びの視点を共有することが重要である。幼稚園と比較し認定こども園では、全員が集まって一斉に研修を実施することは難しいが、今回対象の5歳児保育者が、公開保育や協議で学んだことを全体に共有する形の研修の形も十分に効果がある。このような小さな研修のメリットは、一人一人の保育者が自分の保育に置き換えて考えやすい。今後も、園のすべての保育者が自身の保育を見直す機会になることを願い、継続していきたい。

③キリスト教保育としての視点

当園は、キリスト教保育を基として保育を行っているが、キリスト教保育の視点を教育課程にどのように盛り込んでいくかは課題である。

4. まとめ

本研究への取り組みによって、本園は、初めて、カリキュラム・マネジメントやPDCAサイクルの意味と重要性が分かってきた。今までのねらいは、保育者が困っていることを解消するために立てたねらいであったことを痛感する。今回、遊びに特化したねらいを立て、遊びの評価に専念したことにより、少しずつ子どもの姿の本質を見取れるようになった。第3回公開保育の際に、ねらいと子どもの姿がしっかりと重なった時の感動は忘れられない。その視点を他の学年でも実現できるよう、来年度からも引き続き園内研修を行っていく。

教育課程作成の取り組みは遅々とした歩みしかできていないが、講師より「焦ってつくるものではなく、5年かかると考えたらい」「保育をして行く中で、埋まらなかったところにぴたりと当てはまる言葉が出てくることもある」などのアドバイスを受け、励まされる。また、教育課程の完成のためには、何より、日々の保育を丁寧に行い、子どもの姿を記録していくことが重要だということを実感する。本園は、幼保連携型認定こども園に移行した。今回の教育課程の作成手順を参考に、全体的な計画の作成に臨むことは今後の課題である。

令和3～4年度 施設提案型モデル事業 「最終報告書」

施設名 龍雲寺学園バウデア学舎

【取り組みのテーマ】

こどもの最善の利益を考える
国際法のこどもの権利条約を基にした、こども指針（仮称）が議論され、真のこども中心の教育保育を考え、こどもの主体とは何によって保障されるのかを検証し実践する。

【2年間の主な取り組み内容】

1. クラスの活動概念を大人中心からこども中心に変換する

近年までは、保育所として保育の指導計画を年間計画・月案・週案等に別けて、月1回の職員会議の実施等の、国や行政の指導のもとで実践されていた。故に、立てた計画の通り実践し改善しながらも、均一的なカリキュラムや意思統一が優先され、安全面・衛生面・健康や栄養面では有効だが、学びや遊びの活動としては創造性や主体性や多様性や展開力が十分に発揮できない特性が多く見られ、日本の乳幼児教育保育の問題点として中央教育審議会等でも指摘されている。

又、現状の保育の年齢区分は通年制となり、例えば、満3歳以上になっても未満児クラスの扱い（4月生まれは3歳11カ月まで未満児クラス在籍となる）や、自我形成期の自己の爆発の時期の満2歳の時期が1歳児クラスで保育されている実態を見てきて、保育指針や幼保連携型認定こども園教育保育要領に書いてある事への誤理解が存在していると考えた。長い歴史と経験の積み重ねの継続性を重視し、社会状況やこどもの権利への認識が不十分だったと考えている。（人は新たな知識を得る事よりも、現状を変える方が難しい・ケインズ）

そこで当園では、クラス編制を満年齢の月齢制を中心に考えてひとり一人を検証すると2・3・4歳の異年齢保育体制となった。又、0歳1歳のクラスはひとり一人の発達に合わせた環境を重視し保育士定数に囚われずに、自我形成時期の後半は2・3・4の異年齢クラスとの交流等を促し、多様な保育教諭やこども同士の関係性を保障した。そして、5歳児は単独クラスとするが、活動範囲は自由で自己決定を基本とした。クラスで活動するカリキュラムから、子ども自身が課題や目標や希望を持って遊びを通して学び関係性を持てる環境のクラス編制とした。

【決めごと】①朝のお話しの会や食事はクラスごとで活動するが、遊びに関しては安全面が確保されれば、こどもの自主決定行動とする。②クラスの人数と配置は25名までの複数担任を基本として、1人の大人の価値観に囚われない様にする。③机や棚や椅子を適切な配置し、交流するスペースと一人で集中出来る場所を確保する。（子どもの2面性、孤独な研究者・ピアジェ、社交的な法律家・ビゴスキー）クラスの椅子はこどもの半数程にして流動性を持たせる。④マテリアルルーム（道具部屋）を設置し、こどもが自由に欲しいものを選び部屋に持ち帰る環境を作る。

（時には必要でない物もあるが、探索行動の一部と考える）⑤保育教諭は自分の担当児優先の意識を改め全ての園児に関心と責任を持つ。⑥他のクラスで何が計画さ

れ何が起きているか？を互いに知る必要性がある。こどもの活動や遊びの展開に応じて保育者の責任範囲が流動的となり、担当範囲を固定的に決めるのではなく、保育者同士が子ども理解と連携性を持って流動的に担当範囲を変化させるフォーメンション体制をとる。園全体がこどもの活動を最大限尊重する・行動（探索）時間（探索・試行錯誤）アフォーダンス（こどもの意識の環境）を保障する

結果的に、園全体で保育・教育を行う意識が向上し、同時に子どもひとり一人の理解と保育者の連携が重要なのだと確信できた。保育者が担当児への執着心や他者評価を気にする事無く、活動をプロセス評価できるようになった。

2, 緩やかな計画（後追い指導・援助計画）

教育・保育の指導計画等が、固定的な計画をトレースする（計画通り活動する）保育教育が目標となり、子どもを嵌め込んでいく大人中心の実践を多く見てきた。こどもに自由と選択権を持たせると遊びの展開は無限に広がり深まる、そして成功や失敗どちらにも大きな価値が見出され探求の継続性が保障される。こどもの最善の利益を考えた時に、日々、瞬間、瞬間にこどもの意識と活動と関係性は変化し、保育の正解は一つではなく・永遠でも無い事を私達は実感させられている。

ゆえに、こどもが自由に展開できるように計画は大まかにして日々対応変化する事が必要となった。こどもの後追いの保育は禁物と言われてきたが、こどもの活動を観察し配慮し柔軟に環境を整える為には、あえて、後追い保育・教育計画をする意識の方が良い（修正するのが当然）結果となった。ただし、絶対的に計画は必要で保育者に子ども理解と見通しとねらいが無ければ振り返りも不可能である。緩やかな計画は振り返り後の改善や展開が適切でスムーズに進み、こどもの学びと遊びのプロセスの積み重ねの経験が保障できた。こどもが自由になるには保育者も自由に考え受け止めるスキル（目の前のこどもを理解し自分で考えて計画する）が必要となった。指針が全体的な計画と書き換えられた本当の意味を理解出来た様に我々は実感した。

3, 社会的保育教育（固定的担当制保育からの脱却）

アタッチメントの重要性は言うまでもないと思う。それ故に、一対一の濃い関係性が重要と認識され、3対1よりも2対1の保育の質が良いと言う保育実践者も居る。しかし当園では、先ずは特定の保育者とこどもの信頼感からのアタッチメント形成は大前提であるが、そこで留まらず他者との関係性構築を保障する意識がある。

特定の保育者との信頼と安心感を基に、こどもが冒険の旅に飛び出せるように背中をそっと支え、押して援助する専門性が必要と考える。活動範囲が広がれば、他のこどもや他の保育者との関係性の中で新たなアタッチメントの形成や体験が展開され集団となりやがてクラスと成って行く。乳児は決められた担当制が良いと一般には言われているが、安定はしているが限られた誰かだけの責任や範囲での狭い関係性になっている面があると思う。又、担当児に執着して他児との関係性が疎遠な状況も良く目にしている。専業主婦等の孤独な子育て状況と同じ問題点が保育現場で起こるのは何とも皮肉と言える。こどもにアタッチメントが形成されれば、園内では安心安全なこども中心の環境が整っている。多様な他者との関係性をこども自身のペースで築ける教育保育が必要と考える。

事例、当園の0歳児クラスは1階玄関の近くにある。又30年前から0歳児の環境によくある、こどもの活動を遮る柵は設置していない。その中で、コロナ対策で

部屋のドアも開放していた晴れた6月に、12カ月児がハイハイして部屋から玄関を歩いて園庭に出て、ニコニコしながら30分ほど園庭で探索行動して部屋に戻ってきた。担当は送り出し園庭の保育教諭に任せて他の園児との交流も含めて楽しんでいった。その後、その園児は日常的に園庭散歩（ハイハイ）を楽しむようになり他の0歳も楽しむようになった。又、園庭に出る前に保育者に顔を向け確認し合ったり、雨では玄関から戻ったり、コースを変えたり、お気に入りの場所（砂場）を定める等ルーチンを意識していた。この事で0歳が行動に見通しを持っている事が確認された。このような行動は出会う他者や環境を信頼し自己決定で行動する様子は、社会を信頼する事に繋がっていると確信する。ゆえに、家庭的保育に留まらず、社会的教育保育機能と専門性が少子化社会の日本に必要と感じ、当園の目標は「社会的教育・保育」と定めた。

4. 分散型リーダーシップ

長きにわたって、日本は国から県と金沢市を通して行政指導の下に、最低基準や規定違反が無いかが問題となり、より高質な保育の追求義務は無かった。よって、上意下達型の指示指導によって保育はと統一均一化され易い形態と成っていた。独自路線の建学の精神を述べる幼稚園教育も小学校の準備や適合を優先する傾向が有りひとり一人の対応は充分とは言えない。

その中で、こどもの主体性を尊重し多様性を保障するためには、上意下達のリーダーシップよりもミドルリーダーを活用した分散型リーダーシップへの変換が必要と考えた。上司の意見を初任者やパート保育者に説明するミドルリーダーでは無く、初任者の意見や現場状況を上司にも報告し意見するのがミドルリーダーの役割であり、初任者にも自ら学ぶ努力をするマインドのリーダーシップが必要となる。要は、皆がこどもを理解し考え合い検討し合う関係性が重要となる。

又、日々変わる教育保育の展開に対応するには月1回の職員会議では反省しか出来ず、手遅れで毎回同じことの繰り返しとなる。保育者が適時最適に対応するには自己判断と相談検討できる保育者同士の関係性や環境が実践現場に整備されてなければならない。園長・主幹の指示命令に従うだけでなく、保育士や自ら考えられる状況とスキルがこども中心の教育保育には必須である。

特に幼保連携型認定こども園は学校であり、カリキュラムマネジメントする権限と実践が義務付けられている。同時に0歳から小学校までの学校教と育保育全体を担当するので、家庭教育の補完を脱却した、保育士や幼稚園教諭とは違った専門性が必要で実践を積み重ねている。そして、この部分は現在石川県が日本初で研究検討しており今後がたのしみである。

主体的自由と多様性の為には、保育者間にも同様に相互的（インタラクティブ）関係性の分散型リーダーシップによる検討振り返りが必要となる。ただし、安全面・健康面・衛生栄養面の正解は1つなので、上意下達でも問題ない。

【研究まとめ】

①クラスの活動概念の改革

②緩やかな計画

③社会的教育保育

④分散型リーダーシップ

其々の取り組みを説明したが、こども中心の0歳から6歳就学までの教育保育とは何なのかは未だ定義できなかつた。当に、こどもの思いと願いを受けとめ実践を改善し続けて積み重ねるプロセスそのものが本質の様に考えている。

正解が多様で変化し続ける中でどの様な取り組み（研修）が必要なのか。この事項に関しては、PD研修（**professional development** 専門性の展開）医師や裁判官弁護士等と同様に実践の検証振り返りから専門性を高められる、対話検討型の研修の必要性が示した。中でも教育保育では、PTD研修（**progress through dialog** 対話を通じた進化展開）を園内・園外・公開保育等の研修を大学・養成校・各専門家・保育者が相互的に対等に専門家として検討研究し合う体制が必要で、当園は日々実践し地域全体の教育保育向上に今後とも精進したいと思います。

龍雲寺学園バウデア学舎 木村昭仁